

第3回館長講座 「イランでの生活と遺跡 ペルシャ帝国の遺跡をめぐる」

前回お話ししたラメ・ザミン遺跡の発掘中過ぎた村の様子と、見学したイランの遺跡のうち、ペルシャ帝国に関するところを紹介する。

ハリメジャンの生活

発掘の際に宿泊し根拠地としたのがエルブルス山脈の中にあるハリメジャン村だった。村は緑の中にあり、セフィードルード（白い川）が近くを流れ、水田が広がる中にある。

村の入り口

村の入り口にはこんな池があり、メンバーの一人、東京国立博物館の杉山二郎さんは上高地の大正池のようだ、といっておられた。

入り口近くに店があり、石けんとたばこを主な商品とする雑貨屋さんで、店の前には村長も含む男たちがたむろしていた。

教会の建物もすぐ近くにある。イスラムですからこれもモスク、中には入らなかった。

夏休み中とはいえ、7月から9月初めまでの期間、学校を調査本部として借りていた。教室が三つあったので作業スペース、食堂、台所としていた。

学校の前での記念写真。みんな傾いているけれどこれは地面が傾いているから。私の隣の女性は政府派遣のインスペクター(視察監督官)、エッテサムさんとその娘。どうも彼女はインスペクターであっても夏のバカンス代わりに来たようで、発掘現場にはほとんど来なかった。あとでテヘランに帰ってから政情混沌の中で博物館でもストライキなどが続き仕事ができなくなっていたとき、ペルシャ語ではストライキのことは「エッテサーブ」というのだと聞き、妙な言葉の類似に皆で笑った次第。

川を渡るランドクルーザー

日本から運んだトヨタランドクルーザー、4輪駆動でないと走れないぬかった道や、斜面を走った。ハリメジャン村から遺跡まで行く途中に小さな川があったが村の人にはこの川の流れは交通の障害でも何でもなかったが、ランドクルーザーのために橋を渡すことになり、村人に作ってもらった。作るところを見たが、まず木を切って板を作るところから始めていたのには驚いた。

「通勤」の一コマ

雨が續くと道がぬかるんでしまつて急な斜面を4輪駆動でも進めなくなる。そんなときはロバ、ラバ、馬をどこからかチャーターして遺跡に向かう。

アタイの家

村の家を下宿として何軒かに分かれて住んでいたが、その中で一番偉い人たちの下宿先で、アタイさんの家。下宿の借り方は、まず貸してくれる何軒かを募る。たいてい大きい家だった。賃料の交渉はあとからで引き上げる少し前にやっと決まったようだった。大家が高くふっかけてくる、と松谷さんが怒っていたのを覚えている。いちど考証の場を見たが、日本人は割合すぐ怒るが大家さんは比較的冷静に冷たく対応していたようだった。

私たちの下宿と休みの一コマ

湿度がとても高いので昼間も窓は開け放しで出かけていた。私の隣の新田さんのベッドに鶏の卵があった。昼間まどから入って生んでいったようだった。

この家には番犬がいて、こいつは文字通り番犬。家に近づくやつにとって見知らぬ人には吠えるだけでなく飛びかかってくる。大きい犬なのでとても怖かった。夕方下宿に帰るときには防御と攻撃のために必ず武器となる木の棒を持って行く。木の棒で追い払って家に入るのである。そのうちに帰りにパンを持って犬が来たらこれを遠くに投げ、やつがそっちに向かっている間にさっと家に入る、ということをしていた。そのうちに犬のやつ吠えなくなった。番犬たるもの、腹の減った飢餓状態におかれているので必ず吠えるのである。満腹とはならなくともこいつらは食べ物をくれる奴らだと認識したらしく、そのうち甘えた声を出してよってくるようになった。もはや我々に対する番犬ではなくなったのである。

建物のいろいろ

上二つは住居。左側の家も下宿先として部屋を借りていた。下左は鳥小屋。夕方になると鶏がこの階段を歩いて上がっていくのがおかしかった。右下は家畜小屋。どちらも「校倉つくり」 正倉院のルーツ？

村の中に共用のパン焼き窯

小屋だったのだが屋根は嵐の時に壊れて飛んだそう。小麦粉をたらいを逆さまにしたようなものの上でこねて麺棒で平にして、枕の小さいものでぱーんと窯の壁に貼り付ける。右上のお母さんは、見ていたら「ボホリ」(お食べ)といって一切れくれた。焼きたてのナンのおいしかったこと。左下はコックのヤヒアさん。

稲刈り

秋になると稲刈りがおこなわれていた。右下は田んぼを荒らす野豚の監視のための張り番の小屋。夜通し見張るそうで昼間はこどもたちの遊び場

村のこどもたち

10 歳くらいまでのこどもは写真を撮れ、とせがみにくるが、女の子は少し大きくなるとあまり人前に出なくなっていた。水くみと水運びは女の子たちの仕事だった。右下の写真の緑色のものはトイレ用品。

右上の写真の女の子は写真をとってもらうために妹をおめかしさせて連れてきた。

週に 1 回、ラシュトに買い出しに バザールの中で

ハリメジャンの村には 10 人位の余剰人員の食料をまかなう余裕はなかったので、毎週 1 回、カスピ海に近いラシュトに行って食料を買いだし、ついでにお風呂に入ってきていた。

ラシュトには東芝の現地法人の工場があり、ここを日本からの郵便の中継地にさせてもらっていた。でも雨が降ると車が動けなくなるので、そんなときはフロはあきらめ、世フィードルート沿いを走るバスをつかまえて買い出し部隊だけでかけることになり、なんかいかわたしはむらにるすばんをしてのこった、このときの教訓、人間は、2・3 週間風呂に入らなくても死ぬことはない。当たり前ですが。

紡錘車で糸を紡いでいるおばさんを道ばたで見かけた。そろばんと同じような計算機があった。計算の仕方はわからないが。

テヘランやホラムシャハルで怖い目にも・・・

ホメイニ革命直前のテヘランでは、ストライキやデモが続き、デモ隊は一部暴徒化してヨーロッパ資本の入っているホテルや会社を破壊、しかし 1 階のフロアだけ、イスラムの教えに反する酒屋や夜営業するクラブなども焼き討ちの対象となっていた。ホテルの屋上で見ていたら、ホテルの人からデモ隊に見つかる危険だからやめてくれとも言われた。

ランドクルーザーの陸揚げと陸送

調査開始前にランドクルーザーを日本から船で運び、その車の陸揚げと陸送のため、ペルシャ湾奥の港、ホラムシャハルに滞在、後にイラクの侵攻の際には真っ先に戦場となってイラク軍によって徹底的に破壊された。それまで心地よい町を意味するホラムシャハルからフンニシャハル(血の町)と改名された。1977 年 1 月、在ホラムシャハル日本国総領事館が開設されていて、車の引き取りにご協力を頂いた。

1978 年のホラムシャハルとカルーン川

宿泊していたホテルが警察の隣だったので、当初車を引き取りにいったときには安心と思っていたが、車を送り出すとき、つまり革命前夜で騒然とするようになってからは警察の隣だとかえって危ない、といわれて日本人の家に避難したこともあった。

この写真を撮ったときに兵隊にとがめられ、カメラを取り上げられそうになった。

ペルシャ帝国の遺跡

ここから話を変えて、古代ペルシャ帝国の遺跡をめぐるります。

アケメネス朝ペルシャ帝国(前 550～330)はイラン高原南西部に定着したペルシャ人の首長 アケメネス(在位 700 頃～675 頃)を始祖とする。前 550 年、キュロス 2 世はメディアを滅ぼして独立、次いで新バビロニアを征服した。ダレイオス 1 世はインド北西部まで含めて西アジアのほとんど全域にわたる史上最大の統一帝国を建設した。首都はスーサ、後ペルセポリスにも置かれた。ゾロアスター教が盛んになり、美術に独自の様式が生まれた。イラン文明の基盤をつくっただけでなく、シュメール以来の西アジア文化を集成して一大文明圏を現出し、その影響は東は中国やインド、西はヨーロッパに及んだといわれる。しかしスキタイ遠征やギリシア遠征(ペルシア戦争)に失敗し、後アレクサンドロス 3 世(大王)の侵攻をうけて、前 330 年に滅亡した。

パサルガダエ キュロス大王の墓

キュロス 2 世は、紀元前 6 世紀に、古代オリエント諸国を統一して空前の大帝国を建設した。現代のイラン人はキュロス 2 世をイランの建国者としている。

陵墓は、切石を 6 段に積んだ階段状基壇(最下段: 13.4×14.4m、H=5 m)の上に、切妻屋根をもつ“家型方形墓”(H=6 m)が堂々と乗っている。

大王と王妃の遺体が納められていたともいうが、今は墓の中には何もない。発掘調査によれば、石棺はもとより、その破片すらも残っておらず、柩があったという痕跡もないという。

ギリシャ・ローマ時代の史家たちは、「広さ 6 m²ほどの小さい墓室には黄金の柩と寝椅子・卓などが置かれ、壁には王者の標である紫を主調とした豪華な衣服が掛かり、宝石をちりばめた装飾品があったというが、アレクサンドロスが当地にやってきたときには、既にそのほとんどがなくなっていた」と記している。

パサルガダエ

パサルガダエは、ペルセポリスの北東 87km にある。紀元前 546 年に、アケメネス朝ペルシャ帝国の最初の首都として、キュロス 2 世により建設が開始されました。

往時は、幾つかの宮殿・神殿などを備えた壮大な都市だったというが、今は謁見の間址・楼門址・神殿址などを飾ったであろう門柱や柱の礎石などが点在するだけ。

右下は魚体人間像で、“謁見の間”東入口の門柱に刻まれた浮彫だが、上半分は破壊されているため全体像は不明。

右側に、宮殿内に向かって進む人間の片足の膝から下、人魚の下半身みたいなもの(下から人の足先が覗く)の一对、左に牛の後脚らしきものが見える。

ペルセポリス

現代名タフティ・ジャムシード。ダレイオス 1 世 (在位 522～486 B.C.)、クセルクセス 1 世 (486～465 B. C.)、クセルクセス 2 世 (465～424 B. C.)が新年祭のために建設した都。ファールス平原に西面する 455 m×300m の大基壇を築き、その上に宮殿などを造営した。西方の大階段を上ると「クセルクセスの門」があり、謁見の間 (アパダーナ)、中央の間、ダレイオス 1 世宮殿、クセルクセス 1 世宮殿、百柱の間、宝庫、北の砦、南の砦、兵士宿舎、貯水池、アルタクセルクセス 2 世の墓が建てられていた。宮殿の屋根は台座のある石の円柱、動物が背中合わせの形になった柱頭、および木の梁によって支えられ、壁面は煉瓦で構築された。門や宮殿の浮彫のモチーフは人面獣身像やライオン像などが取入れられた。前 330 年にアレクサンドロス大王の侵入により破壊、略奪された。

遠景・近景

クセルクセスの門

大基壇北西部にある緩やかな傾斜の広くゆったりした階段を上ると、人面の有翼牡牛像に守られた列柱門の前に出る。門にはクセルクセス 1 世の碑文が刻まれており、「この万国の門は私が建てた」と記されてある。

アパダーナ 謁見の間

獅子、ライオンは最強の獣だが、それよりも強いのがペルシャ帝国の王であった。

貢ぎ物を持った各地の部族たちが連なる。階段に足をかけたレリーフ実際にこの階段を上っていったのだろう。

ダレイオス 1 世の宮殿

大基壇の高さをあわせて、ダレイオス 1 世宮殿は地上から 18m のところにある。宮殿に上る階段の側壁には、王の饗宴に供する動物、ブドウ酒の皮袋、食器や杯をたずさえた人々が浮き彫りされている。牛を襲うライオンの主題は、階段側壁の三角形に多用される。

柱頭

右側のグリフィンの柱頭はイラン航空のロゴマークになっている。

アレキサンダーモザイク

ナポリ国立博物館にある、ポンペイ出土のモザイク画。紀元前 333 年、マケドニアのアレキサンダー大王が、ダレイオス 3 世率いるペルシャ軍を屈服させた「イッソスの戦い」。縦 3.13m、横 5.82m と、壁一面を覆うモザイクは、アレキサンダー側に欠落も多いものの、その戦闘の激しさを伝える迫力のある表現で観るものを圧倒する。

ポンペイの遺跡群の中、通称「ファウノの家」にあったもの。ポンペイの中でも、最も

広く、豪華な邸宅の1つでその床を飾っていた。

ナクシュ・ロスタム

ナクシュ・ロスタムは、ペルセポリスの北6kmにある巨大な磨崖遺跡。ここは、紀元前6世紀から5世紀にかけて造られたアケメネス朝ペルシャ帝国の王墓群。

帝国の最盛期に君臨したダレイオス1世をはじめ、クセルクセス1世、アルタクセルクセス1世、ダレイオス2世の四基の王墓、つまり、父—子—孫—曾孫と、ダレイオス1世から連続する四代の王の墓がここにある。いずれも巨大な磨崖に大きな十字形が彫り込まれ、その中心に穴がある形になっている。

ダレイオス1世：アケメネス朝ペルシャ帝国の全盛期の王。在位522～486年。ダレイオス1世は法による支配を目指し、新都ペルセポリスの建設を開始し、ペルシャ帝国の繁栄の基礎を築いた。帝国の領土を中央アジア・インド方面に広げ、さらに小アジアを超え、ギリシア北方のマケドニアに進出した。ギリシア本土の征服をめざしたが、ギリシア側の抵抗にあって苦戦し、次のクセルクセス1世に遠征の事業は引き継がれたが、結局失敗した。それがペルシャ戦争である。

クセルクセス1世：アケメネス朝ペルシャ帝国第4代の王で、ダレイオス1世の子。在位前486～465年。ギリシア遠征の失敗した後に死去した父ダレイオス1世の意志を継ぎ、前480年に自ら大軍を率いふたたびギリシア遠征に向かった（第3次ペルシャ戦争）アテネに入りいったん制圧に成功したが同行したペルシャ海軍が、アテネ海軍と戦い、サラミスの海戦で大敗を喫し、クセルクセスはペルシャに引き揚げた。ペルシャ帝国のギリシア遠征は失敗に終わり、ペルシャに戻っていたクセルクセスはその後部下の謀反にあい、殺害された。

アルタクセルクセス1世：在位紀元前474年～424年。先代の王クセルクセス1世の子で次の王クセルクセス2世の父。

ダレイオス2世：在位：紀元前422年～404年。アルタクセルクセス1世の子。ペルシャ国内でも反乱が相次ぎ、エジプトも反乱を起こして失った。だが、ギリシアでのアテナイ連合軍とスパルタの戦いであるペロポネソス戦争でアテナイが敗北すると、スパルタと手を結びギリシア諸都市を奪回し、治世はかろうじて保たれた。

左下 ササン朝時代のレリーフ

右下 ササン朝ペルシャ帝国のアルダシール1世の後を継いだシャープール1世(在位241～272)は、対外戦争や征服事業に従事し、強勢を誇り王権を盤石なものにしました。

ローマ帝国と何度も戦争をしたが、ほぼペルシャ優位に展開し、244年にはローマ皇帝のゴルディアヌス3世を敗死させた。このペルシャ側資料が、ここナクシュ・ロスタムにあり「ゴルディアヌスは殺され、その軍隊は壊滅した」と刻まれている。

また、シャープフル 1 世は、260 年にエデッサの戦いでローマ軍を破り、ローマ皇帝ヴァレリアヌス帝を捕虜とし、この歴史的事実を記念して、ナグシュ・ロスタムのダレイオス 1 世の王墓の横下に、レリーフを刻ませた。

チョガザンビル

時代がペルシア帝国より前になるが、車の陸送の途中で寄ったアッシリア帝国時代の遺跡。「ザンビル」は右下にあるようなカゴのことで、カゴを伏せた形なのでこの名が付いたという。エラム王国の都市遺跡でスーサの南東 40km に位置する。

遺跡の中央に西アジア最大のジググラトが位置したが、その底辺の一边は 105m の正方形で、四隅が正確に東西南北に向けられていた。現在の高さは約 28m であるが、本来はその倍の高さに聳えていたと思われる。

ジググラトは古代メソポタミアの諸都市に設けられた、階段状の塔の形をした建築物。順次小さくなる方形の段を 3～7 層重ね、最上位部に神殿をまつる。

ジググラトのまわりに囲壁をめぐらし、さらにその外側に 470m×370m の城壁をめぐらして聖域を構成した。聖域内には多くの神殿遺跡が確認され、東の隅に宮殿と王墓が存在した。各処から多数のエラム語、アッカド語碑文、円筒印章などが出土した。都市は紀元前 640 年頃にアッシリアのアッシュールバニパル王によって破壊された。

スーサ ペルシア帝国の冬の都

ハンムラビ法典が出土したペルシア帝国の冬の都です。ここには城のような建物があって、古代の都を復元したのかと思ったら、これは調査を継続しておこなっていたフランスの調査本部だそうです。